

A・MUSEUM

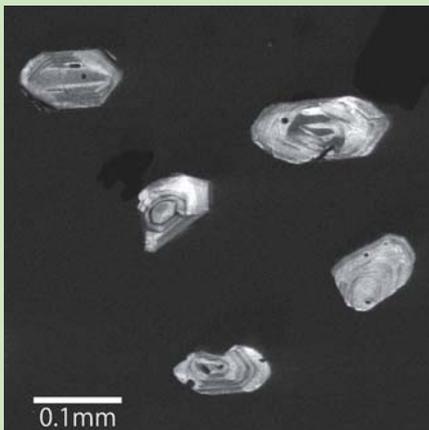
vol.77
[2013.12.15]



ミュージアムパーク
茨城県自然博物館



採石場に露出している「日本最古の地層」(常陸太田市町屋町)



「5億年」の年代が測定されたジルコン粒子
(提供：田切美智雄)

自然観察会「日本最古の地層を観察しよう」

日立市から常陸太田市にかけての山々には、約5億年前（古生代カンブリア紀）にできた「日本最古の地層」が広く分布しています。この地層は、当時の大陸のへりにあった火山列島付近でできたと考えられており、日本列島の起源を知るうえでとても重要な地層です。

当館では、その地層をつくる岩石に含まれているジルコン粒子から5億年前の地層であることを明らかにした田切美智雄氏（茨城大学名誉教授・日立市郷土博物館特別専門員）を講師にお招きして、11月4日に自然観察会を開催しました。田切氏による解説は熱意とユーモアを交えてとてもわかりやすく、29名の参加者は、5億年前の地層をつくる角閃石片岩や変成流紋岩などの岩石をじっくり観察することができました。（資料課 小池 渉）

さわれる展示ハートフルミュージアム

当館では、毎年11月下旬から12月上旬の期間で「さわれる展示ハートフルミュージアム」を開催しています（今年は11月23日から12月8日まで）。開館3年目の平成8年からはじまったこの展示も、今年で18回を数えました。「ハートフルミュージアム」のネーミングは、いつも心を込めてお客様をお迎えしようという当館のホスピタリティの精神を表しています。

当館では、常設展示でもみるだけでなく、さわったり、音を聞いたり、匂いをかいだり、五感を使って楽しむ参加体験型の「ハンズオン」展示を数多く用意しています。ハートフルミュージアムは、さらに充実したハンズオンを来館者の方々にも楽しんでいただこうと企画したイベントです。12月3日から12月9日の一週間は「障害者週間」であり、特に視覚障害者の方々に楽しんでいただけるイベントを目指しています。

ハートフルミュージアムの展示資料は、開館当初に用意したものが多のですが、当館が取り組んでいるアウトリーチ事業「移動博物館」の資料や「教育用貸出資料」、企画展で展示した資料なども活用しています。展示では、資料と資料の間隔に余裕をもった配置をする、白地に大きな黒文字の読みやすいラベルをつける、すべてのラベルに点字シールを貼るなどの工夫

を心がけています。

人気のある資料は、けもの毛皮、恐竜やアンモナイトなどの化石、いろいろな木でできた木琴や木のパズル、昆虫や果実の拡大模型、鳥や虫の声当て装置、匂いのする木の葉や木の実などです。けもの毛皮は、ノウサギやムササビ、ツキノワグマなど、近隣に生息する代表的な哺乳類12種で、毛皮には爪や肉球、鼻の頭までついています。剥製は、タッチング資料にすると傷みが激しかったり、移動しづらかったりするので、この毛皮は、その欠点を克服できるように工夫してつくられています。いろいろな木でできた木琴や木のパズルは、平成15年に開催した第28回企画展「木の不思議」で人気を博した資料を、ハートフルミュージアムでそのまま利用しています。

また、特に人気なのが、生きたヒトデやウニなどにさわれる海の生きものタッチング水槽です。このイベントは当館の常設展示でも人気の水の生き物コーナーを担当しているアクアワールド茨城県大洗水族館の職員の協力を得て実施しています。

これからも、さらに充実したハートフルミュージアムを目指して取り組んでいきたいと思ひます。皆さんもぜひお楽しみください。（企画課 小幡和男）



展示を楽しむ来館者



海の生きものタッチング水槽

第60回
企画展

サバンナからのメッセージ - アフリカの自然とその保全 -

次回企画展のご案内

野生動物の宝庫アフリカには、ゾウ、カバ、サイ類などの巨大草食獣をはじめ、多種多様な生物相がみられます。しかしその一方で、密猟、農作物被害など、人間と野生動物の間には様々な軋轢が生じています。本企画展では、アフリカ東部および南部地域の自然環境の紹介とともに、貴重な生態系の保全の取り組みについて紹介します。

会 期 **2014年3月8日(土)～2014年6月15日(日)**
3月8日は午後1時からの公開となります。
開館時間 9:30～17:00 (入館は16:30まで)
休 館 日 毎週月曜日 (月曜日が祝日の場合はその翌日)

記念行事

●記念講演会「動物写真家がとらえたアフリカ」

日 時：3月8日(土) 13:30～15:30

場 所：博物館内

講 師：前川貴行氏 (動物写真家・日経ナショナルジオグラフィック写真賞2012グランプリ受賞)

対 象：中学生以上

定 員：280名 (先着順)

●自然観察会「動物園の中のアフリカ」

日 時：3月23日(日) 10:00～12:00

場 所：東京都多摩動物公園 (現地集合)

対 象：小学生以上 (小学生は保護者同伴)

定 員：30名 (抽選)

参加費：保険料1人につき50円

「わくわくディスカバリー」と「スポットガイド」を紹介します 展示解説員 3

このコーナーでは、毎回当館の展示解説員（ミュージアムコンパニオン。以下MC）の仕事などについてお伝えしています。今回はMCが中心となって実施されているイベント「わくわくディスカバリー」と「スポットガイド」について紹介します。

「わくわくディスカバリー」は、親子向けの参加体験型イベントです。このイベントは、4月から11月の毎月第4土曜日の午前と午後の各1回、おもに幼児、小学校低学年の子どもと保護者の方を対象に行っています。自然や科学に対する関心を高めることを目的として、親しみやすいテーマでの工作をともなった体験活動となっています。準備は開催の約1か月前からはじまります。まず、自分たちの企画した内容に沿って試作をします。このとき、子どもたちでも楽しく簡単につくれる方法を話し合い、工夫を重ねます。次に、工作のための材料をそろえます。最後に、レクチャーを準備し、作り方のプリントを作成します。これらも、わかりやすく楽しいものとなるように工夫します。短い時間の中に、MCがつくり上げた楽しい仕掛けがたくさん詰まっているのです。

「スポットガイド」は、毎週土曜日、午前と午後

に各1回ずつ行われます。博物館の展示について、MCが独自の解説資料を作成し、15分で特定のテーマについて詳しく解説します。1つの展示物に焦点を絞り、普段行われているガイドツアーよりも深い情報をお客様に提供しています。スポットガイドの内容は、MCによってさまざまです。自分の解説資料を毎年新しい情報に更新して内容を深めていくMCもいれば、毎年違う展示物の解説資料をつくり増やしていくMCもいます。また、スポットガイドでは、ガイドのための小道具を使うことが特徴となっています。たとえば、ダンゴムシのお話では、生体を使ってお客様に親近感をもってもらい、拡大模型を使ってからだのつくりについて詳しく解説します。また、モグラのお話では、剥製を用意して毛に触れただけでビロードのような感触を体感したり、大きなグローブを使って土中で自由に動き回れるように進化した前足を紹介したりしています。

今回紹介したMCのイベントは、当日来館したお客様が気軽に参加できるイベントとなっています。楽しみながら博物館ならではの知識を得ることができます。土曜日に来館された際には、ぜひご参加ください。（教育課 潮田好弘）



わくわくディスカバリーの様子



スポットガイドの様子

干支の午（馬）

2014年は午年です。動物でいうと「馬」となります。馬にまつわる話は、馬文化と言われるぐらい多岐にわたり、農馬、軍馬、競走馬、神馬、食用馬等、用い方によって多様に区分され、また、絵画や小説、詩歌などの分野でも題材とされてきました。これは、人と馬の歴史が大変長く、人間の良きパートナーとして、今まで強い繋がりがあることによるものといえます。

当初は、野生馬を飼い慣らし、口

に馬銜をかけ操り、その強い牽引力でおもに農耕や運搬に用いていました。やがて背に鞍を置き乗馬を容易にし、後に鐙によって安定した騎乗ができるようになったことが、馬の発展を大きなものにしました。乗馬は紀元前3千年頃中央ユーラシア草原地帯の遊牧民からはじまったといわれています。やがて馬具が発明され騎馬集団としての活動が活発となったのは紀元前1千年頃だと言われています。これ以降、馬は軍馬として

コラム by director SUGAYA

戦争には欠くことができない戦備品となり改良も進みました。軍馬の時代は第二次世界大戦まで続くのです。



イラスト：上脇田直子（ミュージアムコンパニオン）

ザンビアの植物

研究ノート 1

今回は、2014年3月に開催する第60回企画展「サバンナからのメッセージーアフリカの自然とその保全」のために実施したアフリカ・ザンビアでの調査報告の第2弾です。私の担当は植物であり、アフリカのサバンナの景観や植物の特徴を調査することと、主な植物を採集し展示資料とすることを目標にしました。滞在1週間という短い期間で、国立公園スタッフの協力により多くの成果を上げることができました。

サバンナの原自然が残されているといわれる南ルアンゴア国立公園をみた私の第一印象は、思っていたより樹木が多いことでした。地理の教科書でよくみるサ

バンナは、草原に水平に枝を張ったアカシアなどの樹木が点々と生えているような景観ですが、この植生は「グラスランド（草原）」とよばれ、ザンビアにも確かに存在します。しかし、樹木がたくさん生え森林といってもいいような「ウッドランド（疎林）」とよばれる植生がひろく広がっていました。

調査することができた主なウッドランドは「ミオンボ」と「モパーニ」です。ミオンボは、主に平原に見られる林で、数種のマメ科ブラキステギア属の樹木を優占種としています。調査中、ここでアフリカスイギュウの群れに出会うことができました。

モパーニは、川に近いところによくみられる林で、マメ科のモパーニ（コロフォスペルムム・モパネ）という樹木を優占種としています。この樹木は蝶に似たおもしろい形の葉をしています。モパーニでは、高さ3mほどでそろって刈り取られたような林によく出くわします。これは、ゾウが樹木の成長点を食べるためにできる景観です。この周辺では、サバンナを代表する樹木バオバブ（アダンソニア・ディギタータ）をみることができました。

これらの成果は企画展の中でじっくりご覧いただこうと思っています。（企画課 小幡和男）



ミオンボウッドランドとそこでみたアフリカスイギュウ



モパーニウッドランドに生息するゾウ（拡大写真はモパーニの葉）



バオバブ

蛍光をみてみよう！

皆さんは、「蛍光」という現象をご存じですか。

紫外線などの特定の光をあてている間だけ、光を発する現象のことを、蛍光といいます。この現象は蛍石ではじめて発見されたものです。すべての蛍石が光るわけではありませんが、その青色の光は「蛍石」の名の由来にもなっています。

この蛍光という現象は、私たちの日常生活にも活かされています。例えば、洗剤に蛍光剤が入っている

のがあることは、よく知られています。この蛍光剤が、太陽光に含まれる、目にはみえない紫外線を吸収して青白く光ることによって、ワイシャツなどの白い衣類の色を、より白くみせてくれるのです。

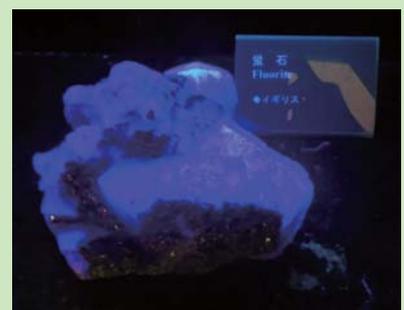
博物館の第2展示室では、蛍石以外にも、方解石や珪垂鉛鉱など、紫外線を受けてさまざまな色に光る鉱物たちをみることができます。

博物館にお越しの際には、ぜひ一度、暗やみの中で美しく光る鉱物た

小さな発見ーミュージアムコンパニオンー

ちをご覧ください。

（ミュージアムコンパニオン 大庭明日美）



光る蛍石

化石調査で重要な地元との協力

研究ノート 2

通常、はじめての場所に化石を採集に行く場合には、事前にその地域で産出が報告された論文などを調べたうえで、地層が分布している場所が描かれている地質図や崖（露頭）などの情報が描かれた地形図などを持って現地に行きます。ところが、1日中歩き回っても、化石のかけらどころか、採集できる可能性のある露頭も探せずに終わってしまうことがよくあります。また、幸運にも化石が含まれている地層が発見できても、土地の所有者や管理者に許可を得なければ採集することはできません。

しかし、地元に住んでいる協力者がいると、この状況は一変します。化石に興味をもち日頃から山歩きをしている方々は、地元の情報をよく把握しています。地震・大雨や工事などによって変化した露頭のことや、そこに至る道路の情報などは地元に住んでいないとわからないことが多いものです。また、その土地の所有者の情報や採集許可にいたっては、地元の人が協力してくれた場合の効果は絶大です。

茨城県北西部の太子町、常陸大宮市には新生代新第

三紀中新世の約1600万年前の地層が分布しています。この時代の地層からは、ステゴロフォドンというゾウの化石や大型哺乳類の足跡化石などが発見されているほか、貝や植物の化石も数多く産出しています。これらの化石は、現在開催中の第59回企画展「ジオ・トラベル in いばらき - 5億年の大地をめぐる旅 -」で展示しています。これらを展示できるまでには、地元の多くの方々に協力いただきました。今回の企画展のオープニングセレモニーにはそうした方々にも出席いただき、展示をみていただくことができました。

また、今年の5月には地元の協力者の方からの情報を得て、常陸大宮市にある会社に協力いただき、その採石場から200点を越える保存状態の良い植物化石を採集することができました。これらの化石についての研究はこれからですが、当時の環境を復元する貴重な資料になることでしょう。これからも、地元の方々と連携を取り、協力していただきながら、地域資料の収集と研究に取り組んでいきたいと考えています。

(資料課 滝本秀夫)



今年5月に化石を採集した採石場
(常陸大宮市)

採集した植物化石
コナラ属(大)とヤナギ属(小)



メジナ

メジナは釣りの対象として人気のある魚です。沿岸の岩礁域で生活しており、成長すると全長が60cmにもなります。当館の海の水槽でもメジナを展示していますが、全長は約8cmと、まだまだ子どもサイズです。

海の水槽の中央には岩が大きく張り出し、浅場と深場の2つの水槽に仕切られた構造になっています。このため、深場で飼育している大型の魚が浅場にいる小型の魚を襲うことはできません。大洗港で採集された

小さなメジナは、当然浅場で展示することにしました。しかし数日後、狭い岩の隙間を通りぬけ深場へ泳いでいってしまったのです。メジナたちは水槽内の端や隙間付近で泳ぐことで、襲われずにすんだのでしょう。今では、餌のときや夜間水槽内が暗くなる時は浅場に避難し、広いところで悠々と泳ぎたいときには、深場に行くなど2つの水槽を自由に行き来しています。

自由奔放なメジナですが、これが

おさかな通信

ら成長し、大型の魚と肩を並べて泳ぐ日が楽しみです。

(水系担当：武藤 唯)



メジナ

天体ショー 2013

2013年もたくさんの天体ショーがありました。5月には「水星・金星・木星の大集合」、6月には「スーパームーン」、8月には「おとめ座のスピカ食」と「ペルセウス座流星群」、どれもすばらしい姿をみせてくれました。その中でも2大天体ショーといえば「パンスターズ彗星」と「アイソン彗星」の到来でしょう。

パンスターズ彗星は、国内では3月8日頃から西の空で観察できるようになりました。マイナス1等まで明るくなると期待されていましたが、実際には双眼鏡でやっとみえる程度の明るさでした。それでも、塵を主成分とするダストテイルは日を追うごとに幅が広くなり、3月30日には尾の広がりは90度にも達し、大彗星の片鱗をみせてくれました。

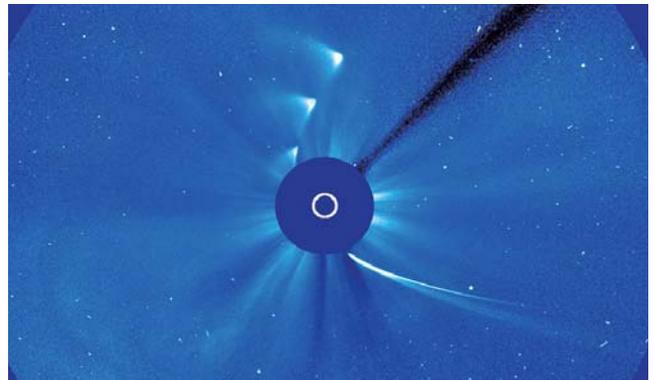
世紀の大彗星として注目されたアイソン彗星は、



ハッブル宇宙望遠鏡が10月9日にとらえたアイソン彗星の姿(提供:NASA)

2012年9月に発見されました。アイソン彗星は「サングレイザー」とよばれる太陽のすぐそばをかすめるように通過する彗星です。太陽に近づくと、その熱で彗星本体からガスや塵が激しく吹き出し、大きくみえるようになりますが、分裂してしまうこともあります。残念ながら、アイソン彗星は11月29日に太陽に最接近した際に、太陽の熱などによりバラバラに崩壊しほぼ消滅してしまいました。彗星の一部が残っているようですが、肉眼での観察は難しいとされています。

宇宙の壮大な条件が幸運にも重なり合ったとき、幻想的な姿で私たちを楽しませてくれる彗星。今後どんな彗星が現れるのか楽しみです。(資料課 諸橋靖子)



近日点(日本時間11/29 04:09)通過前後のアイソン彗星。右下から太陽に近づき、右上に離れていくように。中央の白丸は太陽。(提供:NASA・ESA/SOHO/LASCO C3)

キタミソウ

季節の話題

キタミソウは、北半球の寒冷な地方の湿地に分布するゴマノハグサ科の小さな植物で、環境省の絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。根際から出る長さ2~5cm、幅3mmの細長いさじ形の葉が特徴で、2.5mmほどの5裂する白い花を咲かせます。名前のとおり日本では北海道の北見地方で1901年に発見されました。氷河時代の生き残りといわれ、千島列島などの寒冷地の湿地に自生していました。しかしながら北海道では現在、絶滅したといわれています。

このキタミソウが、2001年に小貝川で発見されました。キタミソウは福岡堰の開閉による人為的な水位管理との密接なかかわりの中でひっそりと生育していたのです。春になって田植えの時期が近くなると福岡堰の水門が閉まります。キタミソウの生えているところは水没し、すべての陸上植物はいったん枯れてしまいます。秋の稲刈りの季節になると水門が開いて水位が下がります。川底の緩やかな勾配に沿って、徐々に川底が乾いていきます。川底の泥の乾燥の進行に沿ってキタミソウは発芽していきます。寒くなってい

くこの季節に水辺で発芽するのは、寒冷地を好むキタミソウにとって、競争相手の少ない願ってもない好条件だったことでしょう。さらに発芽から開花、結実までが、約1か月という短くも、背の高い植物の進入前に子孫を残す有利な戦略となっているようです。

小さなキタミソウは、巧みな生命力で、12月の寒さを楽しむかのように、今日も元気に可憐な花を咲かせています。(教育課 服部仁一)



キタミソウ

トピックス

○常盤松御用邸の調査報告書を出版します

都市部の自然は、瞬く間に変化していきます。大気汚染や開発の影響で減少している動植物も少なくありません。このため、都市部に残された緑地で動植物の調査を行うことはとても大切です。

当館では2009年から、都市部の数少ない緑地の一つである常盤松御用邸において動植物の調査を行ってきました。これは、常陸宮正仁親王殿下のご理解とご支援によるものです。この調査では、他分野の専門研究者の参加と協力を得て、維管束植物、コケ植物、鳥類、昆虫類の調査を行いました。常盤松御用邸では2002年から2004年にかけても調査が行われています。それと比較すると、ギンヤンマやテングチョウなど新たに記録された種もある一方、かつて記録のあるマイコアカネやカラスアゲハなどみつからなくなった種もあることがわかりました。植物の調査は今回の調査がはじめてで、イヌアワなどの希少な種を記録することができました。当館ではこれらの結果をまとめ、「常盤松御用邸の動植物相」というタイトルの報告書を年末に出版する予定です。この報告書が、失われつつある都市部の自然に対する理解と保全に役立つことを願っています。(資料課 鶴沢美穂子)



常盤松御用邸に生育するイヌアワ

○第16回菊花展示会を開催しました

当館では、毎年11月上旬の約10日間、菊花展示会を開催しています。開催16回目にあたる本年は、11月3日から13日までの会期でした。坂東市菊花会(以下菊花会)と、坂東市立七郷小学校(以下七郷小)の協力を得て、合計86鉢の色とりどりの美しい菊が当館に展示されました。初日の11月3日には開会式を行い、菊花会の倉持重義会長、七郷小の鶴見信一校長からごあいさつをいただいたほか、七郷小児童による菊を育てた感想文発表や、合唱などがありました。

博物館のエントランス正面の壁や、又オエロサウルスの足もとには、菊花会の会員が育てた大輪で豪華な菊が飾られました。また、七郷小6年生児童一人ひとりが一生涯懸命に育てた菊は、松花江マンモスの足もと

にぎっしりと並べられました。児童たちの育てた菊は、莖がぐんぐん伸びたもの、遅咲きのものなど、個性派ぞろいで、きっと来館者の皆さんはほほえましく思ったことでしょう。菊花会の会員の方々、七郷小6年生の皆さん、大切に育てた菊を提供いただき、ありがとうございました。(企画課 内方陽子)



菊花展示会オープニング時の集合写真

○自然講座「どこまでわかったステゴロフオドン」

11月17日(日)、開催中の企画展「ジオ・トラベル in いばらき-5億年の大地をめぐる旅-」の記念イベントとして、自然講座「どこまでわかったステゴロフオドン-発見とその意義-」を開催しました。

この講座の講師のひとは、2011年12月にステゴロフオドン野上標本を発見した元当館ジュニア学芸員の星加夢輝さんです。古代ゾウ、ステゴロフオドンの化石を発見した当時、星加さんは高校生でした。現在は新潟大学理学部地質科学科に進学し、日々野外での地質調査などに励んでいます。星加さんは、地質調査中に崖で化石をみつけたとき最初に着目したのは頬骨の断面だったこと、化石発見後に当館や茨城大学に連絡をしたときのようなすなど、発見者ならではの臨場感ある詳細な状況説明をしてくれました。

講座の終了後には、参加していた後輩ジュニア学芸員へアドバイスする星加さんの姿もみられました。きっと、第二、第三の星加さんのような「若き科学者」が今後も現れていくことでしょう。(教育課 赤羽岳彦)



星加さんによる化石発見時の状況説明

科学研究作品展 ～ミニ博士によるミニ学会～



展示室の様子



ミニ学会では活発な意見交換がなされました

毎年、10月下旬に茨城県児童生徒科学研究作品展(以下県展)が当館を会場に開催されています。今年度は10月24日(木)から27日(日)までの4日間の会期で、多くの来館者に自由研究の力作をみていただきました。これらの作品は県内各地区から選ばれた小中学校168点、高等学校19点の合計187点の作品です。そのテーマ、内容はさすが県展まで残った作品と思わせるものばかりで、出展者の努力の跡がうかがえました。例年、この県展の最終日には表彰式が行われますが、今年度は新しい試みとして、表彰式に先立ち、「ミニ博士によるミニ学会」を実施しました。

ミニ学会は県展に出展した中学生を対象に行われました。選ばれた33作品のうち、発表者は領域別のいくつかのグループに分かれ、各生徒が自分の科学研究について発表し合いました。互いの発表に対し、グループ内で追究テーマや観察・実験方法、結果の整理の仕方、考察などについて議論し、最後に茨城大学の教

授をはじめとする各分野の専門家から生徒たちの研究に対してアドバイスを受けるという流れで行われました。生徒たちはお互いの発表を聞き合うことで新たな刺激を受けたのか、目を輝かせながら活発な意見交換がなされていました。大学の先生方からの専門的なアドバイスもあり、今後の研究もさらに進むことでしょう。

この発表会の中から新しい科学者、研究者が生まれるかもしれません。生徒たちの今後の活躍を期待しています。
(教育課 小泉直孝)

編集後記

最近の気候の傾向として、残暑が長く、やっと秋らしくなってきたと思うのもつかの間、突然気温が急降下して冬がやってくるように感じます。寒さが苦手な私は少し身構えてしまいます。しかし、博物館に隣接する菅生沼には、今年もシベリアから元気にコハクチョウが飛来し、冬の訪れを告げています。寒さに負けず優雅に泳ぐコハクチョウに会いに、博物館にいらっしやいませんか。(Y.U)

【交通案内】



＜車ご利用の場合＞

- 常磐自動車道谷和原ICから20分
 - ＜鉄道・バスご利用の場合＞
 - つくばエクスプレス、関東鉄道常総線守谷駅下車～関東鉄道バス「岩井/バスターミナル行き」乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩5分
 - 東武野田線愛宕駅下車～茨城急行バス「岩井車庫行き」乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩10分
- ※事前に発車時刻等をご確認ください。



【開館時間】

9:30から17:00まで
(入館は16:30まで)
※ペット、遊具、テント、椅子及びテント等のお持ち込みはご遠慮ください。

【入館料】

| 区分 | 本館・野外施設 | | 野外施設のみ | 年間パスポート |
|--------|----------------|----------------|----------------|---------|
| | 企画展開催時 | 通常時 | | |
| 一般 | 720円 (580円) | 520円 (420円) | 200円 (100円) | 1,500円 |
| 高校・大学生 | 440円 (300円) | 320円 (200円) | 100円 (50円) | 1,000円 |
| 小・中学生 | 140円 (70円) | 100円 (50円) | 50円 (30円) | 300円 |

(注):()内は団体料金(20名以上)

未就学児・満70歳以上の方・障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。次の日は入館料が無料です。

- 5月4日(みどりの日)
- 6月5日(環境の日)
- 11月13日(茨城県民の日)
- 3月21日(春分の日)
- 高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日
(ただし、春・夏・冬休み期間中を除きます。)

【休館日】

- 毎週月曜日
- ※12月28日(土)～1月1日(水)は、休館となります。
- ※12月23日(月)、1月13日(月)は開館し、翌日が休館となります。

